

## 人間は考える葦(あし)である

上記の言葉は、フランスの17世紀の思想家・数学者であったブлез・パスカルの著書「パンセ」にある言葉です。

『人間は一本の葦であり、自然のうちでもっとも弱いものにすぎない。しかし、それは考える葦である。』として、『人間が様々な自然の脅威に押しつぶされる様はまさに、風に吹かれたらすぐに折れてしまう葦そのものだが、考えることによって様々な脅威を押し返せるのは、吹かれても強靱な根によって飛ばされない葦と一緒に』と、人間の、自然の中における存在としての弱さと、思考する存在としての偉大さを言い表したものになります。



↑【葦はイネ科の多年生植物】

人間は、考えることによって社会や世界に貢献できます。現代社会を生き抜くにも様々な障害が立ちふさがりますが、人間は考えることによって、その障害を乗り越えていけます。

「人は考える葦である」の言葉は考えることの偉大さを伝えています。

今、伊敷中学校では、「水道がうまく使えない。皆が快適に利用するにはどうすればいいだろうか?」「体育館の外壁工事のためにいつものように通れない。安全に通行するにはどうすればいいだろうか?」「体育大会練習、同じことを注意されず機敏に動くためにはどうすればいいだろうか?」などと、「どうすればいいだろうか?」と考えることが多く求められています。

考えることは偉大です。考えることで大きな力が生まれます。

さあ どんどん考えていきましょう。

## 敬いの心

16日は敬老の日となります。敬老の日は、1947年に兵庫県多可町の門脇町長が「老人を大切にし、年寄りの智恵を借りて村作りしよう」と呼び掛けたのが始まりで、1966年に国民の祝日「敬老の日」となったそうです。

皆さんはお年寄りをどのように観ているのでしょうか。私は以前、高齢者の疑似体験をしたことがあるのですが、耳は聞こえづらく、目は見えづらく、関節が曲がりづらいため行動が遅くなります。自分では何とかしたいと思いつつも、どうにも出来なかったことが記憶にあります。また、老人ホームを訪れた際、職員の方が「よだれを流しながら、手づかみでポロポロとご飯をこぼしながら食べている人も、



認知症で、自分ではトイレもできず下着を汚してしまった人も障がいや病気というハンディがあるだけにすぎず、私たちと同じ人間であり、しかも好き好んでそのようになったのではない。さらに、現在の繁栄した日本を必死になって築いてきたのも彼らなのだということを忘れてはいけない」と言われたことが深く心に残っています。

お年寄りをどのように観て捉えるかが大切です。人生の大先輩。今の生活があるのも彼ら在必死に築いてきたからです。感謝と敬いの気持ちをもって接する必要があります。